

不自然の限度

都留文科大学英文学科教授 佐藤哲哉

カニは前進しているのか後退しているのか分からない。だが目的をもった方向が前進であることは確かである。人は文明といい、先進、後退といい、自然、不自然という。文明と自然とが対立するものであることを自覚することなく、手段を目的の思い違いして満足できればなんとか便利に生きることが出来る。確かに人間の知恵はすでに神の与えた罰を克服するほどまでにふくれた。同時にその知恵ゆえに進むべき方向はきわめて曖昧になり利那の満足に向かって前進している。人類最後まで、残り二十世代、千年と唱える人も出て来た。明らかに破滅に向かっての先進であり、人類の後退である。

自然を山や川、草や鳥にだけ押しつけ、自分はそれを環境と称して独立した存在であるかのような錯覚をした不自然な人間の詭弁によって作られた目的は進むべき方向とは違う。

natureに自然という造語を当てはめ、しかもその造化の意味を失った我々日本人においては特に明らかである。シェイクスピア等を読んでいるとこの語は最も難解なものの一つである。この語は宇宙創

造の力、神とも仏とも言っていないのかも知れないが絶対的な力と一体になっている状態を意味するものである。人間も生から死までの間をnatureといい、親に対してもつべき子供の情、またその逆の情など当然おこるべきであると考えられるものを総て含むものである。そこにおいては草も木も鳥も魚も同じ位置にあり、人間だけが別格ではあり得ない。

自然をこの意味にまでさかのぼってあらためて見直さなければならぬ時が来ている。勿論人間が人間社会の中に生きるためにはむき出しの自然の摂理だけではすまされないことは確かである。過去の哲学者達がどんな論理を組み立てようと、自由、平等、博愛に生きようとする人間に十分な理性を神は与えてはいない。弱肉強食の原理を一つとってもこれの克服のためにはどれだけ長い歴史が必要であったことか。即ち文明とは自然からの離反を意味するものであり、次

から次の盛衰をくりかえし弁証法的に変化して来た。人間がいわゆる人間的になるためには心の内にも外にも自然破壊が必要であったことは事実である。外界の破壊も

文明が栄えるたびにおこった。砂漠化も生み、不毛の荒野をも生んだ。ふつり合いな建造物をもたてた。しかし、そうしたのも「枯れかじける」ことによって人工的な自然となり宗教を生み「わびさび」を生じさせる余裕をもつていった。

しかし、今人間は新たな自然を生みだすいとまのない程のスピードで変化している。わずかな知識の多寡によって人を判別し、目的なしの好奇心や優越意識によって上積みされる発明や発見によって作り出される社会は過去の物差しには合う目盛りはなくなってしまう。歴史は一つの文明の繁栄が利那であることを教える。現代もまた然りである。しかも今度は一地方ではすまされない。地球全体を巻き込むものである。人類を束縛から解放し、困窮から、病氣から救った繁栄が、その奢りが確実に人類を亡ぼす。しかし、もはや平等の社会には救世主も独裁者も現れ得ない。各自が心の中の自然のどの部分を破壊し保護するかを悟る以外に救われる途はない。哲学のない利那的な知識は地球を亡ぼすのに手を貸すだけだ。

都留文科大学社会科学部 地域社会学会 共催 第5回講演会

講演者 池上洋通氏
(障害者列車ひまわり号を走らせる運動や劇団「ひの」等、福祉・文化・平和問題にはばひろく取り組んでいる。「自己実現の時代の地域運動」(自治体研究社)など著書多数。現在日野市民会館副館長)

演題 地域文化の創造とまちづくり
—自治体の課題と可能性—
日時 6月3日(水)午後5時20分～7時
会場 都留文科大学新研究講義棟
N101教室

*どうぞ、気楽にご参加ください。

大西忠治教授 追悼講演会

都留文科大学ならびに、都留文科大学国語国文学会では、去る二月に逝去された大西忠治教授の追悼講演会を、学会恒例の春季講演会を兼ねて開催します。多くの皆さまのご来場をお待ちしています。

中国問題特別講義

都留文科大学社会科学部
テーマ 現代中国学入門
—アジア学序説—
講師 都立大学名誉教授 針生誠吉氏
オリエンテーション
期日 6月6日
時間と場所は後日指定しますので、前日までに問い合わせください。

日時 5月9日 午後1時30分
場所 都留文科大学
新研究講義棟一〇一教室
講師 群馬県立女子大学長 文学博士 平岡敏夫氏
演題 追悼 大西忠治教授
ある戦後の青春と文学
入場料 無料
主催 都留文科大学
都留文科大学
国語国文学会
講師 都立大学名誉教授 針生誠吉氏
講義期間 7月13日～15日
受講料 無料
申込・問合先 社会科学部事務室
電話で申し込みを受け付けます。
【受付期間】7月8日～10日
午前9時～11時・午後1時～4時